特 別 講 演

紫外線による皮膚の免疫抑制と治療への応用

花田勝美 (弘前大・医・皮膚科) Suppressive effect of ultraviolet on cutaneous immune response and clinical significance of phototherapy Katsumi HANADA

皮膚は日光に曝露される格好の臓器であるとともに、免疫臓器でもある。そこで、太陽紫外線が皮膚の免疫細胞に与える影響について概説し、ダニ抗原を主体として発症するアトピー性皮膚炎に対して行なわれている紫外線治療を紹介した。中波長紫外線 (UVB) はLangerhans細胞の数と機能を減少させ、ハプテン特異的サブレッサーT細胞を誘導し、ケラチノサイトに各種サイトカイン、PGE₂、シス型ウロカニン酸の産生を促し、免疫抑制を引き起こす。この結果にもとずき、難治性アトピー性皮膚炎患者に対して、UVBと光増強作用の期待できるUVAを同時に照射し他結果、著しい症状の改善をみた。本法施行後、IgE RAST値は病勢とよく併行したが、T細胞のダニ抗原特異的IL-2反応は必ずしも病勢を反映しなかった。

2 ヤマトマダニと野ネズミ類から分離されたマウス強病原性 *Ehrlichia* 様微生物 ○藤田博己、渡辺百合子 (大原病院・研究所) *Ehrlichia*-like microorganism highly pathogenic for mice isolated from *Ixodes ovatus* ticks and field rodents in Japan. Hiromi Fujita and Yuriko Watanabe

1982年以降、東北地方のマダニ類と野鼠類における野兎病菌の調査中に、ヤマトマダニ (青森県と福島県産) およびアカネズミとヒミズ (福島県産) からマウス致死性の不明感染因子を分離した。感染マウスの肝・脾にはギムザ染色で *Ehrlichia* に特徴的な桑実様封入体が、また電顕では細胞空胞内に多型性の微生物がそれぞれ観察された。マウスによる継代は容易なものの、細菌用培地や培養細胞 (L929) では増殖しなかった。

わが国の *Ehrlichia* 属リケッチアにはヒトの腺熱病原体の *Ehrlichia gennetsu* と最近カゲネズミから分離された1新種の2つが知られる。これらと今回の不明種との異同が今後の課題の一つである。

一 般 講 演

1 ハイリスク・グループにおける蜂刺症とRAST値の意義 熊谷正広¹、町田光司²、町田祐子³、神谷晴夫、(¹ 弘前大・医・寄生虫、² まちだ内科眼科クリニック) Hymenoptera stings and the RAST titer in a high-risk group

山林での労働に従事する会社の職員 108人 (男87人、女21人) の蜂毒 (スズメバチ、アシナガバチ、ミツバチ) に対するRAST値を検索した。その結果、いずれかの蜂に対する陽性者は26人 (男24人、女2人) で24%と高率であった。陽性率は高齢者ほど高く、ミツバチあるいはアシナガバチに対する陽性者のほとんどは、スズメバチに対しても陽性だった。また、RAST陰性にもかかわらずショックを起こした症例を経験した。このようにRAST値を測定することによって、ハイリスク・グループで、次第に感作されていくのが把握でき、蜂刺症の予後予測するのは困難であるものの、検査することによって蜂刺症に対する認識を高め、指導することができた。

3 渡り鳥 (アカハラ) からライム病々病原体の検出 宮本健司・中尾 稔 (旭川医大・寄生虫)、佐藤文男 (山階鳥研) First isolation of Lyme disease spirochete from migratory bird, *Turdus chrysolaus*. K. Miyamoto, M. Nakao (Department of Parasitology, Asahikawa Medical College) and F. Sato (Yamashina Institute for Ornithology)

ライム病々病原体の保菌動物として、これまで野鼠類、特にエゾアカネズミが重要な役割を演じていることを報告してきた。一方、根室市において、渡り鳥のアカハラに寄生していたシュルツェマダニの幼虫や若虫からボレリアを検出して、間接的ではあるがこれら鳥類も保菌動物の役割を行っていることを推測した。そのため、鳥類から直接病原体の分離を試みた。1991年9月に旭川でアオジ10個体、1993年10月に根室でアオジ20個体をそれぞれ検査したが、すべて陰性であった。しかし、1993年に根室で事故死したアカハラ1個体の皮膚から直接ボレリアが検出され、*B. garinii* と同定された。このことから、鳥類も病原性ボレリアの保菌動物であることを初めて証明した。また、この *B. garinii* は、北海道の鳥類へ選択的に感染しているものと推測する。